

2024年3月1日 【清真学園 校長室だより】 国際人への一歩

もう半世紀近く前のことです。高校1年の春、私は短期交換留学生として、今、ドジャースの大谷選手で話題のアメリカ・ロサンゼルスに土を踏むことになりました。滞在した1ヶ月間程の出来事のほぼすべてを、今でも不思議なほどはっきりと覚えています。現地での数多くのアメリカ人の友人たちとの交流がきっかけでコミュニケーション学への関心が高まり、大学では主に英語スピーチコミュニケーションを学び、ESSに所属して英語ディベートの活動に明け暮れました。卒業後、高等学校の英語科教員の道を選ぶのに、迷いはありませんでした。

実は大きなトレンドで言うと、日本の若者たちは概して「内向き志向」であり、円安や語学力不足等を勘案しても海外留学等にあまり積極的ではなく、このままでは日本が国際社会の中での発言力や存在感を失い、国家的な危機を招くと警鐘を鳴らす学識経験者も数多くいるのが現状です。

本校では、長く新型コロナの影響で中断を余儀なくされていた、オーストラリアのPLC (Pacific Lutheran College) への生徒派遣が今夏(7月29日から8月6日)、ようやく再開することになりました。このイベントへの本校生の関心は総じて高く、派遣者の選抜には本当に数多くの生徒が手を上げてくれました。「常に国際的視野をもって社会に貢献できる人間」の育成を掲げる清真学園にとって、このような生徒たちの存在は心強いです。

もちろん、派遣期間が10日程度の短期であることを考えると、いわゆる本格的な「留学」と同じ成果を望むことは難しいと思います。しかし、これまでの、私が様々な学校で見てきた短期留学生たちの状況を踏まえると、派遣生徒たちはこの経験を通して、真の国際人への第一歩を着実に踏み出します。彼らは「固定観念を捨て柔軟に物事を考えることが異文化理解の第一歩」であることや、「言葉の壁を越えた人と人のつながり」を実感するはずで、また自分の英語力が十分ではなかったことの心残りから、英語でのコミュニケーション能力向上へのモチベーションが大きく上がる、そんなケースも数多く見られます。

自分自身の経験に照らしても、高校時代に、異文化の中に身を置いてみることの意義は計り知れません。